かなちゃんは黄金世代四強なのです！？

風早 海月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呉服屋の娘、大江奏（おおえかなで）は古典マニア。

特に小倉百人一首こと競技かるたにおいて驚異的な才覚を持つ。小学４年生でＡ級選手となる、歴代最年少Ａ級昇格記録だ。また、最年少の専任読手にもなっている。

かるたの〝闘い〟の芸術を知った大江奏は黄金世代四強の一翼を担う者と言われていた。

それは、奏を自分の信念と勝利への欲の狭間に誘い込まれるような甘い蜜であった。

注意

・諸事情により、設定が原作や現実と乖離している部分はありますが、ご了承ください。

・旧題名：専任読手、大江奏は黄金世代!?

・作者のかるた力は中学で源平戦を下の句まで待つようなレベルです。かるたについて間違っていてもお流し下さい。（指摘してくださるとありがたいですが、モチベが下がりやすいので批判的に書かないでください。）

・少女漫画＋最強系÷２な作品です。

・少しだけシリアス風味がありますが、軽いので、安心してください。

・感想・評価お願いします。

目　次

小学生編
東大里小学校、校内かるた大会前編 ―― 1
東大里小学校、校内かるた大会後編 ―― 7
高校一年生編
…私、もしかしてＪＫ!?なんて思わないです。 ―― 13
情報は大事。 ―― 18
合宿。呉服店ってこんなに儲かるの？ ―― 23
合宿の夜。事件ですか？ロリ巨乳なんですか？ ―― 28
高校選手権予選『そこは地獄だ…』 ―― 34
かるた会での指導 ―― 42
美しさと詩《うた》 ―― 47

小学生編

東大里小学校、校内かるた大会前編

和歌。

たった３１音で表現される歌。

和歌とは違うが、とある歌人によると『短歌は人の体温に一番近い表現形式』だと言われる。

たいへん自由な詩の形式で、唯一守るべきルールは五七五七七の３１音で作ること。

元は襖の装飾のために選ばれた１００首、小倉百人一首は現代において和歌を歌として楽しむ以外の使い道もされている。

競技かるた。

小倉百人一首を用いて全日本かるた協会の定めるルールの下で行う競技で、文化活動や伝統文化という側面もあるものの、ひとつのスポーツであると言える。

高度な瞬発力・記憶力・精神力が必要な競技で、それは頭と身体の両立が基本である。

☆☆☆☆☆

『史上最年少Ａ級選手現る』

３月１７日、競技かるたの大会、東京多摩大会Ｂ級で府中白波会所属の大江奏選手（１０）が優勝しました。昇段規定により三段から四段に昇段し、Ａ級選手となります。たった数日差となりますが、今まで最年少記録を保持していた若宮詩暢四段を塗り替えました。また、同大会Ｂ級決勝戦にて惜しくも２枚差で敗れた翠北かるた会所属の

☆☆☆☆☆

（……この人も……この人も歌を理解していない！）
『なにはがた――――』
　葦の節の短さと会いに来てくれない激情を感じた。
　あはてこのよをすくしてよとや、と書かれた札を相手が取ろうとした時には音もなく手が札を抑えている。
「ありがとうございました。」
「あ、ありがとう、ございました……」
　普通の大会で袴で来ている彼女は相手と読手にそれぞれ礼をする。とても美しく。とても小学校６年生とは思えない姿。
　その勝ちに、見学していた人はザワつく。
「嘘だろ…Ａ級上がって初めての試合で優勝かよ…」
「まだ１０歳なのに五段か…末恐ろしいな。」
「てかなんだよあの感じの良さは。」
「てかあれって感じとかそんなことじゃないだろ。一字決まり何枚あるんだよ。」
「たしかどっかの高校生だか中学生だかも自分にとって一字決まりは２８枚あるとかほざいてたな。」
「ありえねぇな。」
「確か誕生日の差で史上最年少を奪われた若宮詩暢も同じ世代だろ？Ｂ級も同じ世代が多々いるし楽しみだな。」

☆☆☆☆☆

「あのぉ、もしかして、大江さんって、Ａ級選手の大江奏五段ですか？」
　少し訛りの聞いたイントネーションで話しかけられた奏。
「はい、そうですよ。綿谷くん、かるたやってるんですか？」
「…じいちゃんに教えて貰って。今はＢ級三段。」
「…あ、もしかして！毎年全国大会で優勝してる？」
「そうやで。」
「……なるほど、それは知ってるわけですね。」
　小学校に転校生が来た。１週間くらい前の朝の会で紹介があった

が、あまり人と関わらない（正確には小学校特有の余所者ハブとか方言をからかったりしたため遠ざかったというのが正確だが）子だった。
「良かったら、うちでかるたやって貰えませんか？こっち来てから相手がいのうくて。」
「はい、ぜひ！」

元々、奏はこの東大里小学校に入る予定はなかった。だが、学区の見直しでたまたま今年から隣の小学校になり、たまたま綿谷新と出会った。
『ふくからに――――』
12―19で奏の優勢だ。
対戦相手に植えていたのか新のテンションが高かったこともあり、序盤は互角だったが、徐々に差が開いた。
確かに、小学生離れした新の力は小学校の大会くらいなら余裕でとは言わないが確実に優勝は出来るレベルにある。彼から5枚以上抜ければ同学年としては強者の中の強者と言えるレベルだ。1枚抜けるだけでも強い。でも、そんな新でも、奏のかるたは抜けない。
結局、0―14で奏の勝ち。
「ありがとうございました。」
「ありがとう、ございました。」
同学年に負け無しでも、流石にA級選手に勝てるとは思ってなかった新だが、同学年にA級選手がいるということにショックを覚えていた。そして、その力の差にも。
祖父から受け継いだかるたが奏には通じない。まだまだ、足りない。努力も、経験も、感じの磨きも。
「大江さんはどないしてそんなに強い？」
「色とか温度とかで、札が、歌が、教えてくれるんです。私はここだよって。」
「もしかして、和歌と繋がってるイメージ？」

「そう…なのかな？私の中では歌の声が情景を浮かべてくれる感じです。」
「そっかぁ。やっぱり、大江さんはクイーン目指すん？」
「ううん。私が目指すのは専任読手。今はＡ級読手なんです。」
「そうなんか！」
　奏は微笑む。Ａ級になった以上、ある程度の実績を定期的に残しつつ読手の練習を中心にした方がいいと思いつつ、奏は問いかける。
「綿谷くんは名人ですか？」
「もちろん！僕はじいちゃんみたいな名人になるんが夢や！」

☆☆☆☆☆

「また、ですか…」
　クラスの中心、真島太一の言葉でクラスは動く。
　綾瀬千早の机は片隅に持っていかれていた。
「あのよそもんと話すのやめんならハブ解除してやってもいーけどー？」
「あたしはいいから綿谷くん解除してよ。」
「なんだよ千早。クラスみんなでハブって決めたんだぜ？」
「も、もういいって、綾瀬さん――」
「こいつチビだしビンボーだし田舎者じゃん。」
「でも、綿谷くんかるただったらここの誰にも負けないよ！」
　千早が啖呵切った瞬間、奏はなるべく影を薄めるように務める。この間大勝したばかりだ。
「あー、綾瀬さん？おれ、この間大江さんに負けたばっかりやで？大江さんは日本でも指折りの強さや。」
「え？そうなの？」
　千早は隅っこに影を消していた奏に向き直る。
「え!?…ま、まあ、同学年なら負けない自信はありますけど……」

「そないな事ない！大江さんなら、Ａ級でも、十分戦える！この間だって多摩大会で優勝して五段に昇段したばかりやん！」
奏は消極的に肯定すると、新はそれを否定し、誇大する。
「で、でも、大江さん去年も一昨年もかるた大会出てないよね？」
近くの女の子が奏に聞く。
「……」
「な、なら今年は出ろよ！お前たちどっちかがどっちかを倒す以外に負けたら２人とも卒業までハブだかんな！」

「よろしくお願いします。」
かるた大会はそれぞれ学年別トーナメントになっていて、１回戦、２回戦、とそれぞれ全て同時に行われる。
バン！
と札の上の句の決まり字が読まれる度に響く音。
空札には反応せず、大山札は囲い手に。
観客として来ている父兄や不参加の生徒たちの視線は２人の生徒に注がれていた。
１人は綿谷新。ほかのクラスの女の子相手に手加減無しに払って突いて囲む。もはや囲い手崩しなんて使わないような一方的な蹂躙。大人でもそうそう出来ないようなかるたと気迫が視線を集める。
対して反対に大江奏。一際目立つ衣装は店の宣伝も兼ねてかなり良い着物を身に纏い、決して美少女では無い外見でも和服の美しさを借りた美しい所作と音のしない優雅に見えていつの間にか取られているかるたに魅了されている。
「ありがとうございました。」
相手に頭を下げ、読み手に頭を下げる。礼に始まり礼に終わる。基本の基本を綺麗に〝同時に〟行う奏と新。
どちらもノーミス。０―２５（相手のお手つきすら認めない速さで取っていたため）で勝利した。

読み手の少し年配の先生は読みに集中しながらも驚きを隠せない。彼女も翠北かるた会でＣ級初段・Ｂ級読手である。新が自分より強いことは感じていた。しかし、大江奏五段のかるたの異常性は感じ取ることは出来なかった。

東大里小学校、校内かるた大会後編

準決勝。

とうとうぶつかった新と奏。

「「よろしくお願いします。」」

互いに礼を交わし、読手に礼をする。

余計な言葉など要らない、強者同士のぶつかり合いだ。まだ完成していないとはいえ、綿谷永世名人のかるたそっくりな新のかるたはどんな相手にも引けを取らない。その自負が新を強くする。

自分の札２５枚を並べていく。

（いい感じの配牌ですね。）

大山札が奏側と新側に上手く分かれている。

あさぼらけ、きみがため、わたのはら、の３組は分かれている。というか、一字決まりや二字決まりが多く空札になっていて、奏としてはありがたい組み合わせだ。

しかし、奏の教わる府中白波会は攻めがるただ。多文字決まりが多いこの環境は奏にとって嬉しくもあり、少し大変でもある。

決まり字が長ければ、それだけ囲い手になりやすい。新の囲い手は奏でも崩すのは困難と言える。どちらかと言うと老獪なかるたなのだ。

（歌の景色を――――掴む！）

――――難波津に　咲くやこの花　冬ごもり　今を春べと　咲くやこの花

『なげきつつ――――』

奏の右腕は素早く、でも優雅に敵陣右を突く。

（くっ…まだ足りんのか。大江さんの反応は呼吸とか感じとかそういうんちゃう。流れを理解している訳でもない。分からん。でも、完璧やない。次は抜く！後の先を！）

奏は自陣のしのぶれどを送る。

『おおえやま――――』

『わたのはら　こ――――』
空札も交えつつ２２―２５。未だ新は抜けず。
『すみのえの――――』
空札。
『せをはやみ――――』
また空札。
会場は弛緩して再び緊張する。
さ行の音は送ったしのぶれど以外は空札だ。
『たごのうらに――――』
３連続空札。普通の小学生はこの時点で集中力をかなり削られて周りと話して笑ったりしてしまう。事実がやっとする。だが、３連続くらいならない訳では無い。フィフティフィフティなら８分の１の確率で３連続空札はありえる。
『しらつゆに――――』
４連続空札。しかもこれで〝し〟の札は残り１枚で一字決まりだ。
『寂しさに――――』
５連続空札。さ行はしのぶれどを残して使い切った。あとはｓの音を聞きとったらしのぶれどだ。
新はｓの音を狙う。そして、かるたにおいて、持ってる人間は狙った札が読まれる。
『しのぶれど――――』
新の濁流のような力強い払いで自陣左にあったしのぶれどを取る。
２２―２４。勝負は始まったばかりだ。

☆☆☆☆☆

新は先日の土日に福井に帰っていた。もちろんお金は無いので夜行バスで１人だ。
そこで、綿谷永世名人からとっておきを学んでいた。まだ安定して使えないけど、自分も意識次第でじいちゃんや大江さんのように取れるということを知った。体験した。

千変万化のかるた。それが新の綿谷永世名人の基本であり奥義だ。
（そして、自分のかるたに集中出来れば、音の感じと取りは張り合える。）
『あきのたの――』
『ひさかたの――』
『あしびきの――』
（この間の詠みとは違う…澄んだ水？いや、清流？）
奏の中で、新の〝詠み〟歌が変わっていることに気づく。
奏が強い理由は相手の姿を歌として認識して戦い方を認識することが挙げられる。しかし、今の新からは今までの靄のような歌から透き通る綺麗な流れを詠んだ。
6―7。あの感覚は今もここにある。
（取れる！大敗した相手にここまで！おれはまだまだ成長出来る！）
2―2。
周りの組はほとんど終わっている。
1―2。
『なつのよは――』
（もっと大江さんとかるたを続けたい！）
札が読まれる前に自陣2枚右下を払う。
お手つき覚悟でも奏より早く取る。
読まれたのは新の自陣。
1―1。運命戦。
（運命なんてない。読まれた歌を取るだけ。）
（流れはある。自陣死守基本に忠実に！）
新の札は〝わすら〟。大山札のわたのはら　こが読まれて、空札にわび、わがい、わたのはら　やが読まれた。残る札はわがそ、わすれ、そして待札のわすら。
対して、奏の札は〝めぐりあひて〟。空札ばかりの今回の取り札の中で少ない最初からの一字決まりだ。
『はるのよの――』
『ほととぎす――』

残り2枚なのに、わの空札が多く残っている。
『わがそでは――――』
これが新の対戦相手が大江奏ではなく、高校生の真島太一ならば取りに行くモーションを取るのだろうが、大江奏にとってそれは優雅でなく、今の和服姿に似合わず美しくない。
『わすれじの――――』
これでわの空札は消えた。
『――――――』
（来る！）（……）
『よのなかよ――――』
「ありがとうございました。」
奏は着物の袖をキュッと握りしめながら礼をして読手に礼をした。

結局、新は奏という〝強大な相手〟とかるたを取っていた。だから間違えるようなことの無い最後の空札にお手つきをして負けたのだ。
綿谷永世名人ならこう言うだろう。『自分のかるたを貫けなかったからだ』と。

☆☆☆☆☆

奏は綿谷新という人間を多少見直していた。
みんな歌ではなく音として競技かるたをしているのが気に入らなかった。でも、綿谷新のかるたはかるたを愛していた。その中に和歌も含まれていた。
正直、A級選手でも和歌に造詣が深い人はそう多くない。そんな人相手に負けたくない。それが奏がA級にまで上り詰めた理由だ。
でも、だからこそ、最後の運命戦だけは許せなかった。勝つために歌ではなく音として見ていた。そんなかるたをする綿谷新を許せなかった。
今の自分は帯をしめている。美しくない行いは許されない。それでも、袖を握りしめるなんてことまでしてしまった。

そして、その後悔と激情は決勝戦、真島太一を相手怒りをそのままぶつけて２９―０で圧勝した…いや、してしまったことでさらに加速してしまった。

その日から大江奏五段は府中白波会の練習にも、どこの大会にも顔を出すことをやめてしまった。

☆☆☆☆☆

「ねえ、大江さん。原田先生が心配してたよ？」

夏が過ぎ、冬になる頃には綿谷新を始めとして、綾瀬千早、真島太一の３人は府中白波会所属となり、かるたをしていた。

「…ごめんなさい。今の私はかるたを取れない。」

奏はよく千早に話しかけられた。

内科・小児科医として２０年以上働いている原田先生にとって、見過ごせない状況なのだ。

「ほんとにごめんなさい。」

奏は動きを止めていた足を再び動かして家に足先を向ける。

「新が！」

奏の足は再び止まる。

「新が福井に帰っちゃうんだ！」

「…」

奏はそのまま立ち去った。

☆☆☆☆☆

「大江さん……」

ついに卒業式まで触れることのなかったかるた。

帰ろうとした所を新は呼び止めた。

「この半年。色んなこと考えた。大江さん、歌（うた）が詩（うた）が詠（うた）が好きなんやな。だから音（おと）にしてしまったおれに怒った――――」

「違います。私が勝手に綿谷くんがそんな人じゃないって思い込んで、いざそうなったら自分から勝手に怒って、真島くんに八つ当たりじみたかるたを、歌(うた)を――――詩(うた)をただの音(おと)以下にしてしまった自分に、怒りで美しくない姿を着物で晒してしまった。ただ、それだけです。音(おと)として聞いてる人に負けたくない。そう思ってかるたをしてました。でも、今の私に、詠(うた)を楽しむことは出来ません。ただの音(おと)以下の私が負けたくないなんて……」

「本当にそうかい?」

「原田先生……」

卒業式に来賓できていたことは知っていた(かるた会責任者として東大里小学校のかるた大会の後援者でもあり、地元の小児科医の医院長でもある)が、わざわざこの話をしに来るとは奏には予想できなかった。

「君はただメガネくんとまつ毛くんとの戦い方の中で芽生えた〝勝ちたい〟という気持ちを否定したかっただけだろう?負けたくないから勝ちたいに変わったことを。否定してはダメだ。かるたは闘いだ。勝つことに意味がある…とは言わないが、勝ちを目指す過程に意味があるのだと思うのだよ。私は。だからこそ私は府中白波会を作ったし、後進育成に力を注いでいる。かるたは芸術なのだよ、勝ちに行くその競技者を含めて。」

――――闘いなさい。

原田先生はそれだけ言うと、踵を返した。

高校一年生編

…私、もしかしてＪＫ!?なんて思わないです。

現在、専任読手は７名しかいない。
キョコタン（呼ぶのは周防現名人だけ）こと山城今日子。
ＣＤでお馴染みの五十嵐修。
広島出身で比較的若い廣田幸一郎。
鼻濁音の美しい牧野美登里。
小柄ながら美声と立体的な響きを持つ小峰和光。
読みのピッチが恐ろしく正確な芹沢泰治。
独特な声だがどこかしっくりくる声の九頭竜葉子。
以上７名だ。
専任読手は四段以上で、Ａ級公認読手として５年以上の実績がある者に〝試験資格が与えられる〟と言っても過言ではない資格だ。
「なにはづにー、さくやこのはな、ふゆごもりー、いまをーはるべとーさくやこのはなー」
「はい、ストップ。」
中学生になってからはもっぱらＡ級公認読手として読手を務めている。ちなみに、Ａ級公認読手は三段で取れるので、Ｂ級の頃つまり小学校４年生くらいにはもう取っている。
奏の歌に近いのは山城今日子専任読手だ。いわゆる歌の情報量が多いのだ。
そして、今は原田先生の伝手という名の原田先生の被害者である牧野美登里専任読手に歌い方を叩き込まれている。
ちなみに、３ヶ月後に専任読手になることが内定しているので、こうして付きっきりでの指導をしてもらっているのだ。
「せっかく情報量が多いのに、そんなに固いと何も入ってこないわよ。」
原田先生と同年代とは思えない若さ――――いや、同年代か。あの人も年齢の割に動けるし。

中三の11月の名人位・クイーン位挑戦者決定戦3番勝負の1番目の読手の名前に専任読手として名前を連ねてお披露目となる。
高校入試？あいつは死んだ。
ちなみに奏は都立瑞沢高校の推薦を貰えそうなのでモーマンタイだ。
「いまをーはるべとーさくやこのはなー。」

☆☆☆☆☆

奏が中一の頃、この世代は黄金世代と呼ばれ始めた。
若宮詩暢、綿谷新、大江奏、山城理音。
上記の世代のかるたは周りの世代に比べて際立っていた。
そして、この年、若宮詩暢はクイーンに。
大江奏は専任読手に。
そして綿谷新は公式戦・かるた会両方から姿を消した。

☆☆☆☆☆

（かるた部……別に高校生大会は出なくてもいいかな……）
奏はかるた部のチラシを掲示板で見つけた。
だが、別に魅力は感じてない。
高校に進学して、数日。奏は小学校時代に懐かしい顔2人に拘束されていた。

「肉まんくん！大江さん――――いや、かなちゃん！経験者はかるた部は入れ！」
「はいれー！」
「はぁ!?おれもうかるたなんてやんねぇよ！」
「わざわざ部活でする意味が無いです。」
「頼む、二人とも！5人揃わねぇと部にならないだ！」
「お願い、肉まんくん！かなちゃん！」

「…埒が開きませんね。…西田くんでしたっけ？あなたと真島くん、私と綾瀬さんでかるたやりましょう。全勝した方は全敗側にそれぞれ1つお願いを聞くということで。」
「引き分けた場合は？」
「お互いに願いを叶え合いましょう。つまり、あなた達が入部させたいならどちらかが必ず勝たなければならないということです。まあ西田くんはB級と言ってももと全国2位。私はA級六段の専任読手。どちらが有利かは自明ですが。」
「いいだろう。そっちの願いは？」
「太一いいの!?」
「…なら俺は前提として付きまとわないことは当たり前として、肉まん1週間分な。」
「私は…綾瀬さん。あなたがうちの家でモデルになることです。向こう3年間。」
「……分かった。放課後、部室に来てくれ。読手は当てがないからCDランダムで構わないか？」
「ああ。」「構いません。出来たら五十嵐修専任読手のものがいいです。」
「了解した。いいな？千早。」
「う、うん。」

☆☆☆☆☆

「時間です。」
ラジカセの操作と審判を担当する駒野勉が声をかける。
「「「よろしくお願いします。」」」
「「「よろしくお願いします。」」」
『なにはづに――――』
『しのぶれど――――』
西田と真島の組は西田が取った。

奏と千早の組では少し面白い形になっていた。
千早の陣の右下段にあったしのぶれど。それを奏が抑えていたところに払おうとした千早の指が札をづらしたのだ。
「私の取りでいいですね？」
「……うん。」（これがＡ級最年少記録選手…！）

西田ＶＳ真島、１２―１４。
大江ＶＳ綾瀬、８―１８。
序盤伸ばされたリードはこれ以上離されないと千早も積極的に動くが、如何せん、攻めがるたは劣勢で枚数の差が開くと、崩れやすい。
（くそっ！千早のやつ圧倒されてんじゃねぇか！どうすんだよ！こっちだっていっぱいいっぱいなのに…！）
太一の焦りも虚しく、さらに差が広がる。
西田ＶＳ真島、１０―１１。
大江ＶＳ綾瀬、４―１７。
「ありがとうございました。」
「……っ、ありがとうございました。」
西田ＶＳ真島、８―９。
大江ＶＳ綾瀬、０―１７。
『ありあけの――』
『つきみれば――』
『ゆらのとを――』
７―７。
『わびぬれば――』
『ひさかたの――』
『ももしきや――』
『ゆふされば――』
５―５。
シーソーゲームは終わらない。
太一が取れば肉まんくんが取る。

肉まんくんが取れば太一が取る。
（なんだよ！真島のやつ、こんなに強いなんて聞いてないぞ！）
（調子いいな……だけど、このままじゃまずい。運命戦になんてなったら勝ちの目は消える。自慢じゃないけど運はないからな！）
『こひすてふ――――』
（来た！）
2―1。
（運命戦なんて、やらせねぇ！）
太一は自分の運のなさから、相手陣どちらかが読まれると予想。だが、残る3枚のうち2枚は共札。きみがためは、と、きみがためを、だ。
自分の運のなさなら、残るこころあがくると山を張った太一は敵陣左下段に飛び込めるように力を入れる。
『たごのうらに――――』
絶対とるという気迫の中に、太一の体はいちいち空札で弛緩しない。
（真島……空札で気を抜かない…抜いてくるのか？）
『こころあてに――――』
1―1。運命戦。
肉まんくんの力は太一よりも高いことは自明だ。器用貧乏な太一は武器がない。だが、その運のなさだけは武器だ。
太一は自陣死守なんてしない。敵陣を抜く。
太一の札はきみがためは、肉まんくんの札がきみがためを。
「きみがための大山札の共札で運命戦…囲い手崩しですかね。」
『きみがためー』

情報は大事。

「おーい、真島！肉まん！」
「あー、ハイハイ。」
　学校の購買で肉まんを奢ってもらう肉まんくん。
「その代わりちゃんと部活には来いよ？」
「分かってるって！…別につまんなかった訳じゃないし。」
「素直じゃないですね。肉まんくんも。」
「うおっ!?…なんだかなちゃんか。いきなり横に現れないでくれよ。」
「…善処します。」
　奏は自覚していないが、背の低さ（小柄さ）と研ぎ澄まされた所作は、発生する気配を薄くさせる。
　今にも消えてしまいそうな儚さの中にある雅さが奏の魅力だと肉まんくんは思う。
「ところで綾瀬は？」
「今頃ウチでモデルです。」
「そんな賭けだったな。」

　結果的に、あの時読まれた札は〝きみがため　を〟。囲った肉まんくんの手の下を決まり字の前に破った太一の勝ちだった。
　一勝一敗。引き分け。残り枚数的にも、主将副将とかの順番的にも大江・西田ペアの勝利だったので、少しだけおまけで、酷暑の時以外では公式戦で和服の着用をルールにすることに。
　もちろん実家の呉服の大江の宣伝だ。
　とはいえ、呉服の大江は経営が傾いている訳では無い。
　大規模な旅館の制服の着物の専属契約が結ばれているし、海外にも、着物として以外にも色々な日本伝統布製品を販売しており、かなりの黒字である。貿易黒字に貢献している。
　それはともかくとして、高校選手権はＢＳでも中継されるし、かなりいい宣伝になるだろう。

流石に高校選手権の本戦では暑いだろうから、浴衣に袴、もしくは絽の着物になるだろうが。浴衣なら袴にしてもだいぶ端折れるから夏にはやはりこちらがいい。
正直普通に絽でも暑い。死ぬ。（ちなみに奏は1度大会の読手を終えた後に熱中症で倒れている。）

☆☆☆☆☆

絶対の武器を持たない人にとって、情報というのはなくて困ることは無い。
かるたにおいても当たり前のことだ。
特に高校選手権の団体戦なんかでは特に重要だ。戦略を立てる上で必要なのはまず情報だ。戦略次第では強豪校を弱小校が破ることも可能だ。
「というわけで、情報戦に対応するために専任で情報担当を誰かにお願いした方がいいと思うのですけど、『情報処理の出来る頭脳』と『時間的余裕』がある人いますか？」
入ったからには勝利を目指す。それは奏がここ数年で身につけた勝利への渇望だ。原田先生の指導は〝合う人なら伸びる〟タイプだ。恐らく奏もそれで伸びたと思われる。
「…おれ？」
「太一か机くんしかいないでしょ！」
「僕も!?」
「そうだろ？おれと綾瀬は向かねえ。大江さんは専任読手と家関連で忙しいだろ？」
「はい。ちょっと難しいです。」
「…済まないが駒野、頼めるか？おれは家の約束があってな……母親が厳しくてこれ以上リソースは割けない。」
「確かに机くんならピッタリだよ！理論立ててかるたをするタイプだからね！」
「そ、そうかな？」

机くんは今まで強い経験者の中でたったひとりの未経験。自分は人数合わせなんじゃないかと思っていた。
自分がいなくても出来るんじゃないか。名前だけ入れておけばいいんじゃないか。そう思ってしまっても仕方のない環境だった。太一や奏が狙った訳では無いだろうが、未然に防ぐことが出来たのだ。
「それじゃあ役職も決まったところで申請出しに行こう！」

♡宮内せんせい♡
かるた部員５人そろいました!!
人物紹介←
部長　１―２　綾瀬千歳　いつかクイーンになります！
副部長　１―１　真島太一　器用貧乏なＢ級です。
書記　１―２　駒野勉　情報が命！
機器　１―８　西田優征　Ｂ級で１番丸い気がします！
会計　１―６　大江奏　日本で８人しかいない専任読手！
よろしくおねがいします♡

学校で女帝と呼ばれる先生に提出しに行く。
「メンバーが揃ったから正式にかるた部を発足させて欲しい…と。部長は綾瀬さん以外に変えるなら認めましょう。顧問はとりあえず私が努めます。はい、解散！」
――――というわけで、
「練習方法どうする？」
部長：真島太一
「とりあえずおれと真島で綾瀬の相手を交互にして、空いてる方が机くんに教えるってどお？」

道具等管理：西田優征
「勉です、肉まんくん。」
情報専任管理：駒野勉
「「……」」
「机」「肉」「机」「肉」

「部費3，000円…札1つですね。」
会計：大江奏
「ようし！今日は机くんと取るぞう！」
〝キャプテン〟：綾瀬千早
「「……」」
「いいですね。2回目は私がお相手します。」
「「……」」
「……西田、A級ってみんなこんなヤツらなのか？」
「真島、おれもB級って覚えてそれ言ってるか？」
B級2人は頭を抱えて、机くんは唖然として固まってる。
「強いひとと取らないと強くなれないんです。それは私がC級からB級に上がった時に思わされました。A級とB級に差があるように、B級とC級にも大きく差があるんです。周りの力が押し上げてくれるんです。」
「私は初めてかるたした時のことを今でも忘れないんだ。ものすごく強い人が相手だったんだけど、その時にもし手を抜かれてたら、今、かるたをこんなに好きになることはなかった。私も手加減なんてしない。みんなで近江神宮に、団体戦で行くの。この5人で！」
「……今年は読み手に回れなそうですね。」
少し微笑みながら奏は読み札を〝置く〟。
「やりましょう。まずは部長が弱いなんて洒落になりませんから私は真島くんとやりましょう。肉まんくんは読手をお願いします。」

☆☆☆☆☆

下校時間に女帝こと宮内先生が「下校時間ですよ！」と大声で言うのに若干イラッとしながら帰る奏。
その不機嫌オーラはほかの４人が引くほど。
「なんで歌の途中でドアを思いっきり開けるんですかね。さびしさに、の心の中に潜む寂しさに出家して１人になったさびしさを重ねた歌のなんたるか！」
「ま、とにかく時間が足りないな。」
「ああ。おれも西田もＢ級と言ってもかるたから離れてたからな。感覚の復帰と強化にはもっと取らないと。」
「取れても２試合だからなぁ…そもそもスタミナつかねぇよ。」
「確かにな。大会じゃあ勝ち残れば１日４試合はざらだ。」
その時、千早がふと思い出して呟く。
「なるほど、白波会で合宿してたのってスタミナ対策もあったんだ。」
一瞬４人は（千早は除く）なんで気付かなかった！と顔を見合わせる。
「合宿!!」
「いーじゃん！合宿！やろーよ！」
「え、でも近場じゃ場所が…」
「畳があればどこでも出来ますよ。うちでやりましょう。」

合宿。呉服店ってこんなに儲かるの？

奏の家は豪邸では無いけど、古くからある呉服屋の娘の家である。家はそこそこの和風建築。まあ洋室なども存在しているが。

７ＤＫ＋離れ３ＬＤＫ＋蔵と、なかなかな邸宅である。ちなみに、離れと蔵はほとんど使っていないので奏の城と化している。遮音性が高く、かるたにはピッタリな蔵は奏の練習場所として畳が一般的な競技場である大広間のように畳を敷いてある。合宿するにしても離れも奏の城なので、そこに泊まれる。

都内の２３区外とはいえ、街の中に中々の広さだ。

「へぇー、お店とはちょっと離れてるんだー。」

「元々はここの離れと蔵が本店として使われてたんですけど、流通の都合上本店を街中の方に変えたんですよ。本店という割に大きくなくなっちゃいましたけど。横浜の方に大きい営業所があって、和の伝統製品を国内外に流通させる基点になってます。」

呉服の大江（元々の名前は大江呉服店）の本店の前に集合したかるた部メンバーを家に案内する。学校で待ち合わせの方が近い人もいたのだが、あいにく学校はこの土日に大学入試の模試をするらしく、遠慮した。

「く、蔵だ。」

「何年ものだよ…」

「１５０～１６０年といったところじゃないかな？」

「机くん、正解です。正確には１５４年です。」

「うわー！もしかしてここでかるたするの？」

「はい。一年中快適な温度に保たれてますし、畳も大会とかで使う敷き方で敷いてありますよ。輻射式冷暖房装置も備えていて、音を気にせず冷房が使えます。まあ私がエアコン嫌いなので家は全て輻射式冷暖房装置なんですけどね。」

エアコンのように風が出ないので、室内機の音は無音。室外機は蔵の厚い壁の向こう側だ。

「はい、ここです。」

まず案内したのは離れ。ここで荷物を置いたり着替えたりする。まあ蔵にも部屋の一つや二つあるが、あちらは泊まるには適さない。離れにはキッチンやお風呂場（結構立派な露天風呂）があるが、蔵にはせいぜい洗面所とトイレくらいしかない。

「……なあ、かなちゃん。この家って〝離れ〟なんだよな？」

肉まんくんが思わず聞いてしまうのも仕方ない。大きさは普通の家を超える。

「はい。元本店をリフォームしたので、この大きさなんです。私の家と言っても過言ではないです。」

この言葉に金持ち家系である太一もジト目＋口半開きの、呆れと驚きが入り交じった表情を奏に向ける。

元本店をリフォームして奏の祖母が使う予定だったが、リフォームの起工段階で祖母が倒れて病院で寝たきりになってしまい、リフォーム途中で頓挫。それからしばらくしてから祖母が亡くなりその遺志で、リフォームの再開と、奏に古典の素晴らしさを教えこんだ師匠からの遺産として元本店の建物と土地は奏の所有権となっている。『私の家』はあながち間違いではない。もちろん未成年なので親権者である両親の助言の下にという形にはなってるが。

「大江さん。」

太一は離れで早めに着替えを終えて、奏がリビングに来るのを待っていた。

「アレ用意してくれた？」

「もちろんです！」

☆☆☆☆☆

「おおー、涼しい！」

「気持ちいいー！」

五月雨をあつめて早し最上川。松尾芭蕉の句。

5月を終えて、そろそろ暑くなってくる。今はまだじめっとしているで済んでいるが。

「やっぱり蔵って凄いね。」
肉まんくんと千早は涼しさに驚く。
机くんは蔵の温度の維持力に驚く。
「飲み物冷やしておきたい人は棚に小さい冷蔵庫に入れてくださいね。今電源入れたので、しばらくしたら冷えますよ。」
奏は冷房を弱めに付けて、冷蔵庫の電源を入れる。
「さて、そろそろ始めよう！」
少し段になって、ステージっっぽくなってる場所に千早は立って、宣言する。
「瑞沢高校かるた部、第１回合宿！目標は――――」

「――――２日間で１４試合でーす！」
満面の笑みでの宣言に肉まんくんと机くんの顔が青ざめる。
「肉まんくん、大会だと勝ち残ったら何試合しますか？」
「決勝まで残りゃあ５～６試合…か？」
「８０人の大会で、不戦勝無しなら最大７回です。１日７試合。これが私たちに必要な試合数です。高校選手権の団体戦にしても、東京は激戦区。去年一昨年のデータから机くんの予測出場校数は１１～１３校。間とって１２校として、予選リーグ３試合、決勝トーナメント２試合の合計５試合です。そして、最後に当たるのは勝ち残ってきた実力派の高校。余力を持って戦うためにもこれくらいの経験は必要です！」
「そ、そうなのか…？」
捲したてる奏に、丸め込まれる肉まんくん。
「対戦表も作ってきてあるよ！」

いちにちめ！
１、読み：かなちゃん
太一ＶＳ机くん
千早ＶＳ肉まんくん

2、読み：肉まんくん
かなちゃんＶＳ太一
机くんＶＳ千早
3、読み：千早
肉まんくんＶＳ太一
かなちゃんＶＳ机くん
4、読み：太一
千早ＶＳかなちゃん
机くんＶＳ肉まんくん
（以下略）

「あの…ぼく出突っ張りなんだけど？」
「初心者からのＢ級促成栽培計画を私と千早ちゃんで作りました！」
太一と肉まんくんが頭を抱え、千早は胸を張る。ドヤ！
「机くんなら1年で今の真島くんや肉まんくんくらいの段位まで上がれますよ！まあ、2人なら来年机くんがＢ級に上がる頃にはＡ級昇格してるでしょうけどね？」
太一と肉まんくんは揃って目を背ける。

果たして、地獄の鬼合宿が始まる（？）。

☆☆☆☆☆

机くんのかるたは決して才能で取るかるたではない。だからこそ、太一と肉まんくんのかるたが1番吸収しやすい。
とはいえ……
「駒野、そこは突いたほうが早い。」
「だいたいの位置で全部払っちまえ！」

と、B級の粘り強い選手たちとの試合と長年の経験に磨かれたしぶといかるたを教えられる机くん。
しかも、千早も教えたくてうずうずしてて第４試合では奏相手に２桁取れず、１６枚差で負けていた。
「机くん！もっとコンパクトだよ！」
（くっ…知るのとやるのとじゃあ！）
結局、机くんは５試合目でダウン。読み手をＣＤにバトンタッチして残り２試合を終えた。
「死ぬ……」
「大江さん…強すぎだ。」
男子３人がへばる中、千早と奏は将棋で言うところの感想戦を行っていた。
「やっぱりこの時は――――」
「でも、千早ちゃんの得意札は――――」
「かなちゃんの声――――」
「そうですか？――――」
千早の後ろで大の字になってる男子３人は、そろそろと立ち上がる。
「千早、終わりにしよう。さて、夜はどうする？」
「あ、安心してください。離れのキッチンにありますよ。今日はトンカツです。うちでパン粉から作ったんですよ？」
「よっしゃ！机くん、真島！行くぞ！」
「待ってよ！」「はぁ…駒野、行くぞ。」
得意げに胸を張る奏だが、お構いなしにダッシュの体勢に入る肉まんくん。
肉まんがトンカツを食べる、これ如何に。

合宿の夜。事件ですか？ロリ巨乳なんですか？

「うおっ!?美味い！美味すぎる！」
「うん、美味しいよ！」
「サクサクしてるし、キャベツも細くて綺麗だ。」
「美味しー！」
２試合分休憩を挟んだ机くんもだいぶ回復して、若干グロッキーだった肉まんくんもトンカツに舌鼓を打つ。
ちなみに、味噌汁とキャベツの千切りは奏が。トンカツは奏のお母さんが揃えたタネを奏が揚げた。その間に男子３人は風呂に。
「それはよかったです。自慢のパン粉はフランスパンで作ってるのと食パンから作っているのを混ぜてるんですよ。」
「なるほど、だからサクサクふわふわなのか。」
失礼だが、この中で食が分かるのは太一だけだ。一般人レベルな他の３人も分かるほど美味しいのだが、それを詳しく分かる太一は――
―
「真島くんは美食家ですね。いろんな意味で。」
意味深に微笑む奏。
気まずげにたじろぐ太一。
それに首を傾げる千早。
はてさて、既に天秤は動いているのかもしれない。

☆☆☆☆☆

ご飯を食べ終えて、一息つこうとした時。
肉まんくんがトイレに立ってドアに歩いて転んだ。その瞬間、部屋の明かりがパチッと消える。
ガチャガチャドタバタとした物音と声の後、電気ではなくロウソクのあかりが灯る。
そう、綾瀬千早の誕生日である。

え？ガチャガチャドタバタとした物音と声をハイライトで？わかりましたよ。

奏がキッチンで洗い物とブツの準備が整ったことをハンドサインで肉まんくんに伝えながらリビングに戻りつつ、肉まんくんはトイレに立つ。

真っ暗になって、直ぐに動き出す４人。奏は家に慣れているためケーキを運ぶ係。太一は千早を拘束する係（どうやってかは聞いていない）。机くんは千早に素早く目隠しをさせる係。肉まんくんは素早く照明のスイッチを確保し、必要な時につける係。

まあ、いきなり拘束されて目隠しされればとろうとして暴れる暴れる。

「ちょっ!?太一!?誰!?目隠ししたの！」

とうるさいので、準備が整って目隠しを外す。

「え…！」

「「「誕生日おめでとう！」」」

そして、千早の消したロウソクを太一が片して、プレートを千早の口に突っ込む。

「「「ドッキリ大成功！」」」

千早は笑って言った。

「ありがとう！」

この時、綿谷新から太一にメールが送られていたのを知っているのは太一と千早だけだった。

☆☆☆☆☆

夜、月明かりが輝く頃。
奏は自分の部屋から出て、千早の部屋（正確には女子部屋とした所）を覗くと、千早は爆睡。
（うーん、やっぱり誘おうとしてもこの時間じゃ寝てますよね。）
仕方なく奏は1人でリビングに向かう。そこからお風呂場へ向かう。
この元本店の離れは一部屋一部屋も広いが、風呂も大きい。
例えばサウナが小さいながら付いていたり、内湯と露天風呂とまるで大浴場のような風呂がついていたり。
奏は夜、深夜に星空や月明かりをお風呂に入りながら眺めるのが好きだ。
脱衣場で着ていた浴衣を脱ぐ。透け防止のためにオフホワイトの下着は、方向性は違うものの、思春期男子の夢のままだ。

奏はどうしても自分の体が恨めしい。Ａ級に上がってから突如膨れだした2つの膨らみは、今やメロンもかくやと言わんばかりに重い。原田先生から教えて貰ったとり方に自分のポリシーを混ぜたとり方をしているが、このままではいつか千早どころか太一や肉まんくんにも負けてしまうだろう。
今でも膨れ続ける膨らみ。和装・かるた、両面でこの大きな膨らみはハンデになりつつある。
高校入ってすぐの頃の肉まんくんとのコンビかるたでは、全力同士で０―１７で勝利。ところが今日の４試合目はどうだか。千早が集中してない状況下で０―１６。

閑話休題。この話はまた今度にしよう。とりあえず、今の力量でも同じ高校生に負けるとすれば綿谷新か若宮詩暢くらいだ。
奏は胸とかるたについてそう考えながら、下着を脱ぎ、浴場へ入った。

奏はシャワーブースで身体を流す。
頭から被った雨が白い肌を掛け下りる。
細い身体にある一般的なそれより明らかに大きい丘に、雨を降らせる。
地学的にも身体的にも谷には川が流れる。
そして、雨はやむ。
夜、短針は2を過ぎた頃。
奏は満月を少し欠けた十六夜の月を見るため、夜空のなかに落ちるため、露天風呂へと足先を向けた。

――――――ガチャ。

いくら家が大きくても、スーパー銭湯のような大きな湯船を作りはしない。
だから、ドアを開けてすぐ、お互いに目が合った。
「え……」

沈黙と硬直は何秒だっただろうか。それがどういった衝撃かはさておき、その衝撃は計り知れない。
明らかに男子の誰かである。千早は爆睡を確認している。ほかの人間はここには来ない。
そして、かるた部男子は体格が大きく違う。衝撃と羞恥で思考スピードの下がった奏の頭でも、その背丈と身体付きはたったひとりを特定出来る。
「……ま、真島くん？」
「……ち、違うんだ！すまない！」
慌てて振り返って背中を向ける太一。
「8時から10時以外なら入っていいって聞いてたから！夜ごはん作ってもらってる時入って夜来たら気持ちよさそうだなって！わざ

とではないんだ！本当にすまん！」
「確かに言ってましたね。私も確認しなくてごめんなさい。」
と言いつつ奏は露天風呂に入る。
普通の人なら、ここはそのまま引き返すところなのだろうが、奏にとってみればそれは違った。
・太一が千早を気にしているのを知っていたから。
・何よりも夜空のなかに溶け込みたかったから。
・太一もまた、この夜空に魅せられた存在だったから。
「――――!?……じゃ、じゃあ俺は出るから！」
「いいですよ、一緒に夜空のなかに落ちましょう？」
奏は立ち上がって戻ろうとする太一の目の前で手を広げて、人によっては明らかに危険なセリフを、奏はリスクなんて無いとでも言わんばかりに放つ。
太一は瞬時に方向転換し、ため息をつきながらも、少し喜びながら風呂の奥に横になる。太一もまだこの夜という歌（うた）を楽しみきれていないのだ。
「初めてです。中学の頃から幾人かの友人と夜、ここに来ましたが、空という詩（うた）を分かってくれる人はついぞいませんでした。小学生の頃の真島くんを知ってるだけに少し変な気分です。」
「……」
太一は、無邪気に遊べたあの頃を思い出す。
「確かに、おれは変わったかもしれない。」

――あの頃みたいに無邪気ではいられないのだから。

性差、年齢差、地域差、個人差、所得差、他にも色々。
差だけでは無い。歳を取れば取るだけ色々なことに縛られていく。
「かるたの話をしましょうか、真島くん――――いえ、原田先生たちに習ってまつげくんと呼びましょうか。まつげくん、」

――――攻めるのをやめなさい。

高校選手権予選『そこは地獄だ…』

ザワザワと我らが瑞沢高校の噂をしている。
それもそのはず。瑞沢高校には我らが呉服の大江の歩く広告塔がいるのだ。

全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会団体戦東京都予選

長ったるい正式名称を覚えている人は…いたとしても話す時は高校選手権や近江神宮大会とか言うことの方が多い。
その団体戦に出場するための予選だ。

☆☆☆☆☆

「相変わらずよく分からん目立ち方してるじゃいか。まさか団体戦にエントリーしてくるとは思わなかったよ、千早。」
おカッパ頭（？）の目の細い…いや、体全体が細長い男子が話しかけていた。
「……あっ！ヒョロくんだっ？」
「えっ!?待って？今ちょっと忘れてた!?」
「忘れてた！けど思い出した！久しぶりー！ヒョロくんの高校も出場してるの？ライバルだ!!」
府中白波会に所属するB級選手でもあるヒョロ。ちょっと変わった人物であるが、面白い人だと、曰く奏。
「ライバル？新設かるた部がバカ言っちゃ困るネ。我が北央学園はかるた伝統校で、5年連続全国出場だ。登録選手8人のうち2人がA級だぜ。すごいチームだろ？何を隠そう僕も1年ながら登録選手の一員――――」

「私のチームだってすごいもん！ヒョロくんなんて鼻息でとばせるもん！」
「にゃにおう⁉」
捨て台詞的な言葉にいちいち反応する小物感溢れる２人。
千早は走ってメンバーのいる所へ向かう。

「あ、千早ちゃん。」
そして、その勢いのまま奏に突っ込む。
が、奏が体格差もあるのにガシッと千早の肩を掴むと万力のように動かなくなる。
「何をドタバタしてるんですか？」
「だって――――！」
いつもの様に身体を大きく使って表現しようとするが、奏はテコでも動かん。
「千早ちゃん？女たるもの、雑巾がけしているときも、お布団干しているときも、美しくなければなりません。もちろん、闘う時も。」
真剣な面差しで語る奏に、そばにいたほかのメンバーも、千早も真剣な表情になる。
それほどまでに奏の今の姿は凛として美しかった。

☆☆☆☆☆

今回の予選は、出場校数１２校で、決勝トーナメントと予選リーグに分かれている。机くん予測ドンピシャだ。
予選リーグは４校１グループ３リーグで行われる。
予選リーグの突破条件は各リーグ１位と、各リーグの２位の取得試合数・勝利数・主将の勝利数・副将の勝利数・３将の勝利数……と続く規定で１番優秀な１校が残り、突破となる。
決勝トーナメントは準決勝・決勝の２戦のみで、準決勝はくじ引きで対戦相手が決められる。

「とりあえず一安心だね。ぼくたちのAリーグは取り立てて注目校はないよ。もちろん油断は禁物だけど。せいぜい秀龍館は注意ってくらいかな。A級2人にB級2人。基本的に勝ち星3は上げられる相手だよ。ただ、女子にはあまりグイグイ攻めないタイプの高校みたいだから、逆にB級2人は気をつけて。」

情報担当の机くんのデータ収集能力は凄まじい。有力校のメンバーの取り方まで細かく統計化している。

『なにわづに、さくやこのはな、ふゆごもりー』

『あまつかぜ――――』

☆☆☆☆☆

午前中に各予選リーグ全6×3試合（同時に6会場でやるので、3試合分の時間）を終えて、予選1位で勝ち抜けた。

机くんも2枚差で初白星、しかもC級相手に上げた。

「決勝トーナメント初戦で北央に当たるべきか、あとに回すべきか…」

「いや、くじ引きだから。」

千早が若干アホなことを呟く隣で机くんが真顔でツッコミを入れる。

ガヤガヤと騒ぐ他の4人の横で、奏は自分の不調…いや、衰退を感じていた。

耳は聞こえているし、札も分かる。だが、身体がついてこない。今日は2桁の差をB・C級相手につけられなかった。A級に当たりでもしたら負けるかもしれない。元々A級でもそうそう負けなかったはずの自分が身体のせいで負けはじめる。しかも、原田先生の年齢よりも酷い理由だ。

「あれ？かなちゃんが素振り？珍しいね。」

「確かに見ないな。」「ああ。」
　千早が気づくと、肉まんくんや太一も同意する。
「あはは…太一くんにアドバイスしておきながら、自分の手が札に届かないことがたた起こるんです。」
（太一くん…？）「どこか怪我したの？」
「大丈夫、大丈夫。ちょっと不調なだけ。」
「そう言えば今日の相手にあまり差付けてなかったなぁ。」
「おお、確かに。」
「かなちゃんのデータが、５月中少しづつ枚数差が下がってたのってスランプだったのか。」
「そうですね。とりあえず北央の須藤さんに当たらなければ多分勝てますよ。あの人、読手講習会によく来てるんですけど、相性…というか苦手で…」
　奏はあのドＳはグイグイ来るから嫌いだ。実力なら負けはしないだろうが（今ではどうだか分からないが）、イヤらしい〝全てを使う〟かるたをするのだ。正直、黄金世代の一角に数えられてもおかしくない『準黄金世代』の１人だ。
「瑞沢高校、来てくださーい！トーナメントはじまりまーす！」

☆☆☆☆☆

『なにわづに――――――』
「西高勝つぞ!!」
「「「オウ!!!」」」
『いまをはるべと、さくやこのはな――――――』
『ありあけの――――』
　バン！という音とともに、札が抑えたり払ったりされる。
「抜きましたー！」
「えっちゃんナイス！」
「こっちもキープ！」
「いーかんじいーかんじ！さあ乗ってくよ！」

西高の圧力は大きい。Ａ級２人を擁する瑞沢高校だが、太一と肉まんくん以外の３人は抜かれていた。
その時、千早の右隣の奏が声を発した。
「もっと詩を聞いてください、千早ちゃん、机くん！」

（私と違って〝取れるんだから〟。）

『ちｈ――――』
スッ
千早の得意札、ちは。こういう時に読まれるんだから、千早は持っている。
誰よりも早く、札を抑えていた。
友人の得意札は意外と覚えているもので、４人はキープ。
「連取！」
「とった！…綾瀬、まだ連取じゃねぇ！」
「やった！キープ！」
「いいぞ、駒野！みんな声出していこう！深呼吸して、落ち着いて！…大江さん？」

奏を除いて。
（不味い…この重りのせいで体力消耗しすぎたんですかね……相手の動きの方が圧倒的に早い。）
元々、奏の振りは遅い。詩を聞いて取る。それが今までのスタイルだ。多分一般的には周防名人と同じくくりのはずだ。感じの良さ…と言っていいのかは分からないが。
「不味い…」

１２―２３。
約２倍の差をつけられていた。

この日、奏は絶望した。

「たった半月で２サイズ変わるって嘘でしょう？」

☆☆☆☆☆

『黄金世代四強大江奏５段、大敗。四強は一強になるのか？』

先日行われた、激戦区東京の高校選手権団体戦予選正式名称：全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会団体戦東京都予選の決勝トーナメントにて、事件は起こった。黄金世代と呼ばれる四強の一角、最年少Ａ級選手で最年少専任読手である大江奏５段は瑞沢高校かるた部として団体戦予選に出場。予選リーグでは全勝と力を見つけたが、午後の決勝トーナメントにおいて、東京西高校のＢ級選手相手に２０枚差と大差で敗北。チームは辛くも勝利し、迎えた伝統校北央学園との決勝。同じＡ級選手である甘糟那由太４段に２４枚差で敗北。チームは３―２で歴史的な勝利を挙げたものの、その勝利は影がチラつく結果となった。

決勝での対戦者と枚差を以下に記す。

瑞沢高校	北央学園
西田優征○４	竜ヶ崎透也
大江奏	甘糟那由太○２４
真島太一○８	木梨浩
駒野勉	宅間翔○１５
綾瀬千早○２	須藤暁人

なお、北央学園の須藤暁人５段も『準黄金世代』と呼ばれる黄金世代四強に１歩及ばないまでも高い能力を持つ同世代の選手だが、綾瀬千早４段に敗れていることも黄金世代の陰りに拍車を掛けている。

黄金世代四強の他の一角であった綿谷新６段もここ１年間姿を表しておらず、専任読手山城今日子９段の孫娘である山城理音３段に至っては黄金世代と呼ばれ始めた頃こそ有力選手であったものの１

０年ほどＢ級で昇段が止まっている。
黄金世代でも衰えを見せない現クイーン若宮詩暢７段を除いて、黄金世代に違和感を残す状況を競技かるた界に起こしている。
なお、感じの良さが異常に良いとされる現名人３連覇中の周防久志８段はついこの間発売された大江奏５段の『専任読手の百人一首読み上げＣＤ』について、「読みの方は全然変わってない」と評価していることから、専任読手としては変わらぬ実力を保持していることは伺える。

かるた会での指導

「みんな！今日から白波会の練習に入れてもらおう！全国まで時間もないし、私の先生のとこ、力つけに行こう！」

千早はかるた部の部室に集まったメンバーにそう話す。

かるた部５人のうち、３人が白波会所属選手なので、そう言う。まあ、そもそも肉まんくんが真面目にかるた会に顔を出してるとは思えなかったというのもあるが……

「いや、おれらはいーよ。」

「なんで!?私たち東京代表になったんだよ!?やれること全部やらないと！もっとがんばろうよ！」

「え」

「おれたち翠北会の練習に行くんだよ。うちの師匠基本教えるのうまいから。机くん、強くなりたいって言うからさ。」

「え……」

「じゃ！いってきまーす！」

肉まんくんと机くんが部室を飛び出して走り去った。

「凄いな。あいつらもちゃんと自分に足りないものわかってんだよ。」

呆気にとられる千早に、太一は感心したように話す。

「よし、じゃあ私たちも行きましょう？……原田先生の説教の間へ。」

「「あー…」」

３人が３人とも心当たりがあるので、なんとも言えない表情になりながらも、重い足を文化センターへ重い空気の中、向けるのだった。

☆☆☆☆☆

白波会に顔を出すと、原田先生が満面の笑みで迎えてくれる。

もちろん説教と言っても、結局のところ自分がやらないとできない

ことなのであーしろこーしろと怒鳴ったりはする人でもないし、しないのだが、それでも3人は原田先生の〝指導〟は正座で説教スタイルで傾注である。
「千早ちゃん、まつげくん、かなでちゃん！よく来たね！指導するとこ、いっぱいあるよ！」
　練習場所である大広間の端で正座で座る3人にまくし立てる原田先生。
「まつげくんは、お手つき少ないし正確なんだけど気合が足りんよ気合が！『次はこれを読ませる！』位の気合いで札を呼び寄せんと！あとねー、もっと腰を浮かせてドンッと飛び出していくのもいいよ――相手ビックリするよー。爪もうちょっと切りなさい、ケガさせるよ。」
「千早ちゃんは、気持ちのムラが大きいねー。もっと札に集中しなさい。全国は変人の集まりだからね。決勝戦の送り札！あれはなに？なんで友札早めに分けないの！あと、腕の振りが大きすぎ！もっと札にまっすぐ直線で行けるようにしなさい。最後に、決まり字までちゃんと聞きなさい！」
　一通り話終えると、原田先生は膝を抑えながら立ち上がる。
「さて、2人はとりあえず広史くんと松末くんの2人と取りなさい。」
「あの、その前に1ついいですか？」
「ん？かなでちゃん？なんだい？」
「太一くん、今日は『守り』を意識して取って見てください。攻めずに取りましょう。」
「…分かった。」
「……」
　今の会話を聞いていた原田先生は少しだけ目を見開いたあと、少しだけ片方の口角をじわりと上げた。
「さ、かなでちゃんは1回外に出ようか。隣の会議室にしよう。休憩室として取ってあるが今は誰も使わないだろう？」
「ええ。」

☆☆☆☆☆

原田先生はポットのお湯を急須に注ぎ、じっくりと蒸らしていく。
「かなでちゃんも緑茶でいいかな？」
「はい。ありがとうございます。」
２人分のお茶を手早く用意していく。
「どうぞ。」
「いただきます。」
ズズっと口に含むと、緑茶の旨みの苦味が舌の上に広がる。
「単刀直入に聞くと、〝対症療法〟では効かなくなったかい？」
「ええ。しかも重心が高い分ヘビートップで振りが大きくなり、ただでさえ遅い動きがさらに遅くなりました。Ｂ級にも負けるくらいには。突きならともかく、行って戻るというのは難しいですね。」
原田先生の言う対症療法は原田先生がよく用いる身体操作方法を奏用にアレンジしたものだ。動きが遅いこと、筋力が少ないことをカバーする操作方法だ。
だが、それでも効かなくなってしまったのだ。
「うーん…私が言うのはお門違いで言うべきではないのかもしれんが、それを承知で言わせてもらうけど、抑えてはいるんだよね？」
「はい。まあそれでも動かないことは無いですけど……」
「ふむ……ならば手は２つ。片方で効くかどうかは別の話で、効かないなら両方やるべきという手を教えよう。１つ目は体幹を鍛えることだ。かなでちゃんは小柄で細身なのにそれほどまでの大きさのものを抱えているのがそれを許容できるだけの身体を作る。これがまずは先決。これでダメなら……かなでちゃんにはブレイクスルーが必要だね。」
「ブレイクスルー？」
原田先生はお茶をぐびっと飲みきる。

――――美しくあることをやめなさい。

原田先生は奏にか弱い女の子から戦士への変化を求めているのだった。

☆☆☆☆☆

千早たちが試合を終えると、奇妙でそして、ここにいる男性全員がゴクリと喉を鳴らす桃源郷があった。または女性の一部からの嫉妬（？）の視線の嵐となっているものがあった。

薄い半袖Ｔシャツの上、激しく主張する本当に小ぶりなメロンが２つ入っていそうな豊かな胸。

それが動く度に大きく揺れる。

かるたをとるときよりも激しく主張するのは、奏が腹筋背筋をはじめとする体幹トレーニングを行っているからだ。

……大胸筋が成長するとさらに大きくなる？気にしてはいけない。

「なにしてるの？」

「見て分からないですか？筋トレです。原田先生から体幹を鍛えてやれば不調は治るかもしれないと言われたので。」

「いや、そうじゃなくて…」

「なんでここで？」

千早の言葉を太一が引き取って言うと、奏は諦観の交じる目をする。

「音を立てないようにトレーニングすると効率がいいって…」

「「ああ……」」

あの人の言いそうなことだと２人も呆れの入った瞳になる。

「ところで２人はどうでした？」

「坪口さん強い…同じＡ級なのに、格が違うって言うか…」

「松末さんもやばい。千早と同じ４段のはずなのに千早より取りづらい。」

口々にそう評するが、奏の中ではそれよりも大事なことを忘れていない。
「太一くん、どうでしたか？」
「分からないけど、多分いいと思う。」
「…そうですか。」
太一は圧倒的に攻めがるたに向いていない。確かに、ここぞの飛び出しは悪くないが、感じの良さも、流れの読みも、もっていない。
あるのは札の配置と決まり字の変化を完璧に記憶していることだ。
守りがるたなら、十分にＡ級でもやっていける力はある。もちろん攻めがるたでも積極的に大会に出ていれば運が良ければ勝てるくらいには強いのだが…真島太一という人の運はかるたにおいて良くないことは、自他ともに認めることであった。

「全国大会出場のことは真島くんから聞きました。おめでとうございます。で、かるたは４校くらいでやったんですか？」
「１２校です！先生！すごい大変だったんです！」
「ごめんなさいね。バドミントン部の試合とかぶって見に行けなくて。真島くんがあなたたちだけで大丈夫だっていうし。」
　女帝こと、宮内先生は明らかにおざなりに話す。
「それで、本戦が近江神宮であるんですって？」
「そうです。カルターにとっての甲子園！先生、引率お願いします！」
　千早の言葉に、宮内先生はフッと息を吐く。
「それが行けないの！ちょうどテニス部の合宿で！なんたってインターハイが決まっちゃったから！あなたたち聞いた？決勝戦での奇跡の逆転！まだだったらお話するけど―」
「いえ、結構です。」
「あら残念ね。今年のチームは私が顧問になってから強くなった子たちなの！」
　奏が食い気味に断っても機嫌が悪くならないところから見るとかなり上機嫌らしい。
「もう１つ引率をお願いしたい大会があるのですが。」
「もう１つ？」
「はい。全国大会に向けて調整戦としてＡ級の私と千早ちゃん、Ｂ級の太一くんとに…西田くんの４人で東京西会大会に出るので。つ…駒野くんも戦績管理のために同行する予定です。」
「ほお…いつですか？」
「今週末の日曜日です。」
「……」
　急な話に宮内先生も口を半開きに固まる。
　この大会はかるた協会の主催後援のない地方大会で、西東京（２３区を除いた東京都全域）の有志によって開催される大会で、Ａ級～Ｃ

級相当選手を対象としたごちゃまぜな大会だ。定員は１２０人で、出場条件は西東京に在住のかるた愛好家という条件だ。申し込みは当日となっている。
奏が白波会を後にしたあとに得た光明を実践するにはぴったりな大会だった。
「…まあいいでしょう。どこでやって何時に始まるのかは分かりますか？」
「９時受付開始なので８時半には会場についている必要があります。場所は西東京です。」
「分かりました。後で要項を持ってきてください。」
そう言うと、話は終わりと言わんばかりに机の書類を処理し始めた。

☆☆☆☆☆

奏が今までとっていたかるたは世間では無音のかるたと呼ばれていた。
美しさもさることながら、詩を邪魔しないようにするためだ。
だが、それは競技かるたにおいては無駄が多すぎた。音がしないということは、腕の速度が札でぴったりゼロになることだ。突いたり払ったりするような止まらないかるたのとり方に速度で劣る抑え手だ。
奏が若宮詩暢に勝てないのも、腕の振りが圧倒的に遅いせいだ。聞き分けの良さ（感じとも若干違う感覚なのだが）では勝てるが、振る速度が若宮詩暢は鋭い。奏、若宮詩暢、綿谷新の３人は三竦みの関係だ。奏は新に勝てる。新は若宮詩暢に勝てる。若宮詩暢は奏に勝てる。と言った具合だ。
だが、動かなくなった身体でどうするかという問題が出た今なら新にも勝てないだろう。Ｂ級選手にも大差をつけられてしまうほどなのだ。
原田先生の美しさを諦めるという言葉も、今の奏にはまだ割り切れ

ない。
だから、奏は考えた。
（二兎を追わぬ者に二兎は得られず。美しさと激しさの融合。それが私の目指すかるた！）
中途半端に混ぜ合わせても意味が無い。最近は原田先生と坪口さんの２人と実戦形式で試しているが、平均して枚数差２～３枚での負けまで食い下がれるくらいにはなってきた。
黄金世代四強の力を取り戻すためなら２人相手に平均枚数差５枚（マイナスは負け枚差・プラスは勝ち枚差）くらいになるべきだろう。だが、ここ数日で力が戻るのは感じていた。

集合場所である学校から奏の母の運転する車で１時間かからないくらい。

今回参加するのは４人。千早、太一、肉まんくん、そして奏の４人だ。
正規の大会では無いので、優勝してもＢ級の２人がＡ級に昇級することは無いし、優勝回数もカウントされないが、もちろん勝ちにいく。詩（うた）への愛と、自らの矜持にかけて。

１２０人の参加するトーナメント戦。大会にもよるが、最大７試合前後が標準的。勝ち進めば４試合なんてざらであると、肉まんくん曰く。
知らない人のために記すが、１回戦を勝ち残る人は半数だ…というのは勘違いだ。なぜなら、そんなに多くの人が同時にかるたをとるスペースのある会場などそうそうない。人数調整のために不戦勝がほぼ必ず出る。続けて不戦勝にならないようには組まれるが。

大会初戦。
運良く不戦勝となった奏は観覧の方にいた。隣には肉まんくんと宮内先生。
肉まんくんと奏で観覧時のマナーを宮内先生に仕込む。
決して音を立てないこと。注意力を妨げることはしないこと。これは鉄則である。音を気にするため、エアコンすら付けないこともざらで、近江神宮の団体戦の時には浴衣と袴の大正女学生スタイルを想定してはいるものの、流石に厳しい気がする。そこでパフォーマンスを落としても勿体ない。
「これが…かるた…ですか」
初戦が終わり、部屋を出たところで宮内先生が生気の抜けた顔でそう呟いた。
千早や太一が必死に闘う姿を見て、感じるところがあったらしい。
「別に特別扱いをして欲しいわけではありませんが…私たちとて、全国にかける想いは他の部活にも負けませんし、都大会でも同じです」
奏は宮内先生のかるたを遊びかなにかだと思っているような態度を、真正面からかるたの素晴らしさを伝えたかったのだ。
「そうですね…」
宮内先生は深く頷き、己を反省した。
「大江さん、ルールブックかなにかはありますか?」
奏は宮内先生のその言葉に笑顔で頷いた。

２回戦。
満を持しての奏参戦。相手はＡ級６段のおじさん。それなりに有

名な選手だが、原田先生には勝てまい。あれは荒熊だ。
相手ももちろん、専任読手である奏のことを知っているようで、互いに会釈を交わす。
２５枚の取り札を並べていく。ここからが奏の見出した光明の１つ。
札の置き方はだいたいセオリーがある。もちろん個人差やかるた会毎の差もあるが、だいたいこうというものが決まっている。奏も、府中白波会で原田先生やその他強い人たちから教えてもらったため、その置き方を使ってきた。だが、自らの強みである詩（うた）への想いを十全に使える配置ではないと、変えたのだ。
「えらい変な置き方するなぁ…外しかい？」
おじさんの言う外し…つまり普段と違う置き方をすることで相手を惑わす作戦か…と。それも含まれているが…
「いえ、私が取りやすいように置いているだけですよ」
配られた２５枚の内訳にもよるが、右上段に春、右下段に秋、左上中段に夏冬、右中段に雑、左中下段に恋を配置する。左中段は夏冬と恋の枚数次第だ。
詩の情景で札をとる奏らしい、最善の配置だった。
そして、もうひとつは……
――難波津に　咲くやこの花　冬ごもり　今を春べと　咲くやこの花
――今を春べと　咲くやこの花
奏は梅の花を思い浮かべつつ、次の詩を待つ。
『つきみれば――』
秋の悲しげな情景が、自然と右下段を射抜く。
綿谷新…ひいては綿谷永世名人のような老獪な後の先ではないが、

奏らしい後の先となった。

『たちわかれ――――』

敵陣中段から掻っ攫う。別れながらも未だに想うその気持ちが、札を引き寄せる。

上半身が重いため動きが鈍くなっていたが、そこは呼吸という取り方を採り入れ、振り子のように身体ごと動かすことによって以前の速度を取り戻していた。

０―１７。２回戦突破。

決勝の相手は意外にも太一で、守りを意識した彼に中々差をつけられなかったため、運命戦にもつれ込み、太一の運のなさを信じた突っ込みを下して優勝した。